

博士学位論文審査要旨

2012年12月22日

論文題目：女性向け男性同性愛マンガの表現史
—1970年から2000年まで—

学位申請者：西原 麻里

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 竹内 長武

副査： 社会学研究科 教授 青木 貞茂

副査： 社会学研究科 教授 佐伯 順子

要旨： 本論文は、わが国における女性向け男性同性愛マンガの時代的特質とその変遷について論じたものである。竹宮恵子の「風と木の詩」や萩尾望都「トーマの心臓」など、いわゆる「花の24年組」と称された新感覚派の少女マンガ家たちが、少年愛をテーマにマンガを描き、話題となったのは1970年代前半であった。以降、少年愛というテーマはさまざまに変化をみせ、今日のボーイズラブ・マンガにまで影響を及ぼすこととなった。しかし、その歴史的な変遷と全体像は見えにくく、これまで代表的な作品をもとに論じられることが多かった。また、中間の時期にあたる1980年代、90年代の作品の実態については、不明なことが多かった。

本論文では、1970年から2000年に至る該当作品を地道に調査、実に1462点のマンガ作品を選び出し、その内容を精査している。膨大な作品群を、刊行年代順に並べ、作品傾向を洗い出すとともに時期区分を行っている。さらに、70年代から90年代にかけての時代的な変遷を明らかにしている。以上の構成を論文の章立てに照らせば次のようである。まず、1章では調査対象となる作品を呈示しつつ、時期区分と分析の手法を定めている。つづく2章から5章までが時代的な変遷を、時期区分にそって論じた部分である。2章では少年愛期、3章ではJUNE/耽美期、4章ではプレ・ボーイズラブ期、5章ではボーイズラブ期とが考察の対象とされている。各章とも、ストーリー、キャラクター、カップル、セックスシーンを分析し考察を加えている。

こうした時系列にそった通時的な視点と、各時期ごとの共時的な視点による分析から、次のようなことが判明した。まず物語の舞台がヨーロッパという異国から日本の日常へとシフトしていく。プレ・ボーイズラブ期以降には、理想化された恋愛観が主流となり、同性愛から生じる社会との軋轢や差別といった問題が希薄となる。また保守的な恋愛が主流となっていく。さらに、攻め/受けという形で分離されていた性愛の役割分担がパロディ化されることにより、ジェンダーの価値観や規範がずらされ、次第にエンタテインメント性を高めていく、などの傾向である。

本論文は、これまで著名な作品を中心に語られてきた女性向け男性同性愛マンガの実態とその変遷を詳細に論じたものである。わが国固有のマンガ文化の特質を、1500点近い作品を精査することによって明らかにした実証的で本格的な研究として、その価値はきわめて高い。よって、本論文は、博士（メディア学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2012年12月22日

論文題目：女性向け男性同性愛マンガの表現史
－1970年から2000年まで－

学位申請者：西原 麻里

審査委員：

主査： 社会学研究科 教授 竹内 長武

副査： 社会学研究科 教授 青木 貞茂

副査： 社会学研究科 教授 佐伯 順子

要 旨：

上記審査委員3名は、2012年12月22日（土）の午後1時半から公開学術講演会を行うのにあわせて、溪水館1階メディア学科資料室にて、1時間半にわたり口頭試問を行った。新聞学、メディア史、漫画史、児童文化学など、論文内容および関連事項に関する質疑に対し、申請者は適切正確に解答し、当該分野ならびに関連領域に関する博学な知識と深い理解をもっていることを示した。また語学試験（英語）に関しても、十分な学力を有していることが確認された。以上のことから、本学位申請者は専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 女性向け男性同性愛マンガの表現史—1970年から2000年まで—
氏名： 西原 麻里

要 旨：

本論文は、日本にて商業出版された女性向け男性同性愛マンガについて、その表現内容を数量的に分析し、歴史的変遷について2点の視座から実証的に論じたものである。1点は、1970年から2000年までの約30年間の約30年間を4期に区分し、各期にみられる特徴を考察し論じるという共時的な視座である。もう1点は、数量的分析のデータから時間的な変化を明らかにし、女性向け男性同性愛マンガの変遷を考察し論じるという通時的な視座である。

女性向け男性同性愛文化、通称「やおい」（以下、さまざまメディア・市場で展開する女性向け男性同性愛作品を一括するときは〈やおい〉と表記）は一種の「ハイコンテクストな文化」であり、〈攻〉／〈受〉といった情報はつねに〈やおい〉受容者のあいだで再帰的に“お約束”として共有される。しかし、〈やおい〉の“お約束”の、マンガ作品内における実際の登場頻度、また“お約束”が構築される過程について、歴史的変遷という視点から考察した先行研究は、一部を除いてほぼまったく提出されていない。また、考察対象の選定が曖昧であり、一部の作品の分析のみで〈やおい〉全体を見通すような語りとなされる場合もある。さらに、数量的な分析手法によって実証的に論じたものもほとんどなされていない。そのため本研究では、商業ベースで発表された女性向け男性同性愛マンガ作品を、可能な限り分析シラットに数値化することで、〈やおい〉を実証的に考察するという手法を採用した。

本論文にて分析した女性向け男性同性愛マンガは、計1462作品である。これを年代別に4期に区分し、数量的分析を行う。第1期は、少女マンガ雑誌にはじめて男性同士の恋愛物語が発表された1970年から1980年までの〈少年愛〉期、第2期は男性同性愛を主軸に据えた女性向け雑誌『comic JUNE』が定期刊行化した1981年から1990年までの〈JUNE／耽美〉期、第3期は商業メディアにてはじめて「BOYS LOVE」という表記が登場し、専門雑誌やレーベルの創刊が相次いで起こった1991年から1993年までの〈プレ・ボーイズラブ〉期、第4期は二度目の雑誌創刊ラッシュが起き、先行研究などによると物語世界の主題が大きく恋愛へとシフトした時期と位置づけられている1994年から2000年までの〈ボーイズラブ〉期である。全4期のいずれも同じ分析軸にて調査し、得られた数値から各期の特徴を見出して考察する。また、全4期のデータを通時的に並べ、その変容を明示化して論じる。

数量的分析は、女性向け男性同性愛マンガというジャンルをマクロな視野から実証的に論じることを目的に、ストーリー／キャラクター／カップル／セックスシーンという四つの分析軸から行う。分析に際し、男性カップルを恋愛での言動から〈能動側〉／〈受動側〉に区分し、それぞれの表現の違いや、〈能動側〉／〈受動側〉とセックスにおける〈攻〉／〈受〉との関連性などを考察する。

〈少年愛〉期では、ストーリー：69作品／キャラクター：164名／カップル：89組／セックスシーン：30シーンを分析した。ストーリー分析では、西側ヨーロッパ（とくにフランス）を舞台とする作品が全数のうちで約60.9%と頻出したこと、物語中でカップルは結ばれず、バッドエンドを迎えるものが全数のうちで約41.6%であったことを、データで明らかにした。キャラクター分析では、芸術家や資産家、貴族という非日常的な設定が著しく多く、キャラクターの半数以上の容姿には言語表現にてなんらかの形容がなされており、とくに美しさにまつわる言説は31.9%にのぼっていた。カップル分析では、約54.0%のカップルには年齢や社会的地位に上下関

係がみられたこと、またカップルの〈能動側〉にあたる男性は、身長差や瞳の大きさでは相手よりも男性らしい容姿をしているが、ジェンダー的女性性の記号がキャラクターの容姿に強い影響を及ぼしていたといえる。

〈少年愛〉期はちょうど、少女マンガというメディア自体が、女性の手によって女性のジェンダー意識や価値観を表出させるジャンルへと変容を遂げた時代であった。いつ・どことも知れない憧れとしてのヨーロッパという非日常的舞台によって、そして男性キャラクターであることで、嫉妬など、恋愛の裏の面を描くことが可能となった。同時に〈少年愛〉マンガからは、少女主人公では表現し得ない主体性や恋愛での能動性、そして性を描くため、身体にジェンダー的女性性の記号が付与された美しい少年・男性として、〈美少年〉というキャラクターが造型される。彼らの容姿は女性的、あるいは女性よりも美しいなどと形容されるが、その内面には主体性や自立性など、ジェンダー的男性性が希求されている。

〈JUNE／耽美〉期では、ストーリー：157 作品／キャラクター：336 名／カップル：182 組／セックスシーン：66 シーンを分析した。ストーリー分析では、作品発表時と同時代かつ日本が舞台として頻出し、ヨーロッパ圏が減少する。また結末部分では、1980 年代半ばを境にみると、1980 年代後半からカップルが恋愛関係として結ばれ物語もハッピーエンドを迎えるという作品が増加する。キャラクター分析では、容姿の表現内容における美しさにまつわる表現の登場が約 32.4%にのぼっていることから、〈少年愛〉からマンガにおける〈美少年〉像が引き継がれている様子を確認できた。ただしその図像表現はヨーロッパ的意匠ではなく、美しさはありつつも、日本人として違和感のない、整った容姿をしているという程度の造型へと変化していく。そのほか、性的指向がヘテロセクシュアルであることを表明するキャラクターが〈少年愛〉期から増加していることなどから、社会的通念としてのホモセクシュアルと区別し、エイズの恐れのないもの、そして決して社会的弱者である“女”ではないものとして表現されていると考察した。セックスシーンでは、アナル・インターコースが行われたことが読みとれるシーンが全数の約 75.8%にのぼり、セックスの形態が徐々に読者にアピールされるようになる。ただし、身体の性的部位に関する描写はほとんどなく、ポルノグラフィ的表現はまだなされていなかった。

〈プレ・ボーイズラブ〉期では、ストーリー：197 作品／キャラクター：458 名／カップル：234 組／セックスシーン：259 シーンを分析した。ストーリー分析では、現代／日本を舞台にした作品がそれぞれ 80%以上にのぼっており、読者の日常と隣合わせの世界観が定着しつつあることがわかった。また、幸せな結末を迎えるカップルが約 62.8%となり、永遠の愛を誓うための結婚などといった、異性愛的価値観に関わる理想化された記号がみられるようになる。カップル分析では、一方では年齢や社会的地位、身体的特徴に対等性や同等性が見出されるものの、もう一方では、〈能動側〉と〈受動側〉にジェンダー差が開きつつあることも確認できた。そのため、〈プレ・ボーイズラブ〉期の時点では、〈能動側〉と〈受動側〉に男役／女役というステレオタイプ化は確定していないといえる。セックスシーンの分析では、〈攻〉役がセックスをリードする姿が明瞭に表出しているほか、アナル・インターコースが全数の約 91.9%も描かれるなど、セックスが様式化しているさまが明らかになった。性器が描写されるコマの増加や、男性向けエロマンガの表現手法も確認でき、女性向け男性同性愛マンガが一種のポルノグラフィ的機能をもつようになったことを示唆していると考えられる。

〈ボーイズラブ〉期では、ストーリー：1039 作品／キャラクター：2320 名／カップル：1190 組／セックスシーン：1605 シーンを分析した。〈ボーイズラブ〉期は、いくつかの点で〈プレ・ボーイズラブ〉期の特徴を引き継いでおり、とくに恋愛が成就しハッピーエンドを迎えるカップルは、全数の約 68.2%にまで上昇した。カップル分析では、〈能動側〉の約 50.1%が、相手よりも大人びて男性らしい容姿をしていることを明らかにした。セックスシーンの分析でも、〈受〉身体の性的な部位の描写が大きく増加し、ポルノグラフィ的表現が頻出することから、表現技法としてのポルノ的な側面を明らかにした。また、〈能動側〉／〈受動側〉と〈攻〉／〈受〉の役

割が一致する傾向もみられ、いわゆるボーイズラブジャンルのコードが、このころに構築されたと指摘することができる。

上記の共時的な分析結果を時系列にみた場合、物語の舞台が徐々に読者の日常へと近づいていった〈プレ・ボーイズラブ〉期以降、女性向け男性同性愛マンガの多くは理想化された恋愛観を提供し、社会の軋轢や男性同性愛者差別といったテーマはあまり登場しない。女性的身体をもっていた〈美少年〉は、それゆえにジェンダーの価値観や異性愛規範に対してあからさまに訴えることができた。時代が下り、必ずしも女性的な容貌でないキャラクターが増加することで、保守的な恋愛描写がプロットから浮き彫りになる。しかし、〈攻〉／〈受〉として分担化した男同士という設定によって異性愛的恋愛がパロディ化されることで、ジェンダーの価値観や規範を“ずらす”ことが可能になり、エンタテインメント性を高めることが可能になる。とくに、〈ボーイズラブ〉期における〈能動側〉／〈受動側〉と〈攻〉／〈受〉の一致、また容姿における男性性／女性性の「キャラ化」は、“ずらし”をもたらす装置であったと指摘できるだろう。

以上、本論文の研究成果によって、女性向け男性同性愛マンガの歴史の変遷を数値から明らかにした。〈少年愛〉マンガと〈ボーイズラブ〉マンガは、志向性や表現内容はたしかに大きく異なっている。しかしそれは、1980年代や1990年代初頭の時代を経て、段階的に変遷したためである。これまでの研究にてほぼ抜け落ちていた部分を、実証的な検討可能性を提示し論じたことで、女性向け男性同性愛マンガの表現の変遷史を、データから提出することができた。